

# 日ぐらしの里の平安仏と仁王門

一両文化財修理事業報告一



写真 1・2 修復が完了した二天王立像（左：伝毘沙門天、右：伝持国天）



写真 3 修理が始まった養福寺仁王門（区指定有形文化財）

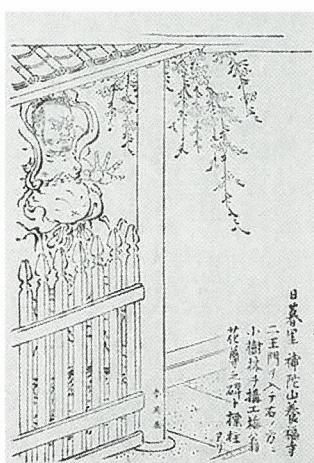


写真 4 谷素外編・勝川春英画「説話百回窟の跡」（早稲田大学図書館蔵）

## 荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会  
荒川ふるさと文化館  
荒川区南千住6-63-1  
TEL 03(3807)9234  
登録(27)0047号-02

**養福寺の平安仏修理完了** 平成 23 年度に区有形文化財に指定された養福寺（西日暮里三丁目）の木造二天王立像は（写真 1・2）、同 24 年度に修理事業が行われました。現在、東京国立博物館等に寄託されています。

木造二天王立像は、毘沙門天像と持國天像と伝えられています。頭部と胴体部を一本で彫りだし、背中の割れを防ぐための内刳りが施されています。この特徴的な技法から、平安時代、11～12世紀に作られた仏像と推測されます。持國天は京の周辺、毘沙門天は東国で作られた作風を持ち、江戸の他の寺院の古仏の事例のように、江戸時代の初めに養福寺に移されたと考えられます。

**仁王門の修理開始** 木造二天王立像は、朱塗りの仁王門（区指定有形文化財）の裏に安置されています。この門の修理事業もこの 3

月から始まりました（写真 3）。この仁王門は、「江戸名所図会」に収録されている、「日暮里物図」に小さく描かれていることでも知られていますが、寛政 4 年（1792）に、養福寺に談林派歴代の区碑（区指定有形文化財）を建てた俳人谷素外が、談林派二祖の井原西鶴百回忌に編纂した「説話百回窟の跡」の挿絵によると、現在と同様に瓦葺で、柵、石畳が敷かれていたことがわかります（写真 4）。今度の修理では、こうした史料を参考にしながら、塗装や屋根瓦も修理し、お色直しをする予定です。竣工は数年先ですが、木造二天王立像は、門の修理完了後に揃つて日ぐらしの里に戻ってくる計画です。それまで両像のお顔を押することはできませんが、伝毘沙門天像が、寄託先の東京国立博物館で、4月17日（日）まで公開されていますので、是非ご観覧下さい。

（野尻かおる）

## 企画展こぼれ話⑪

新発見！

小松崎茂が描いた

南千住のがスタンクの油彩画

新たに発見された小松崎茂の作品 去る平成 27 年 10 月 17 日（土）から 12 月 6 日（日）まで、当館では、荒川区南千住出身の空想画家、小

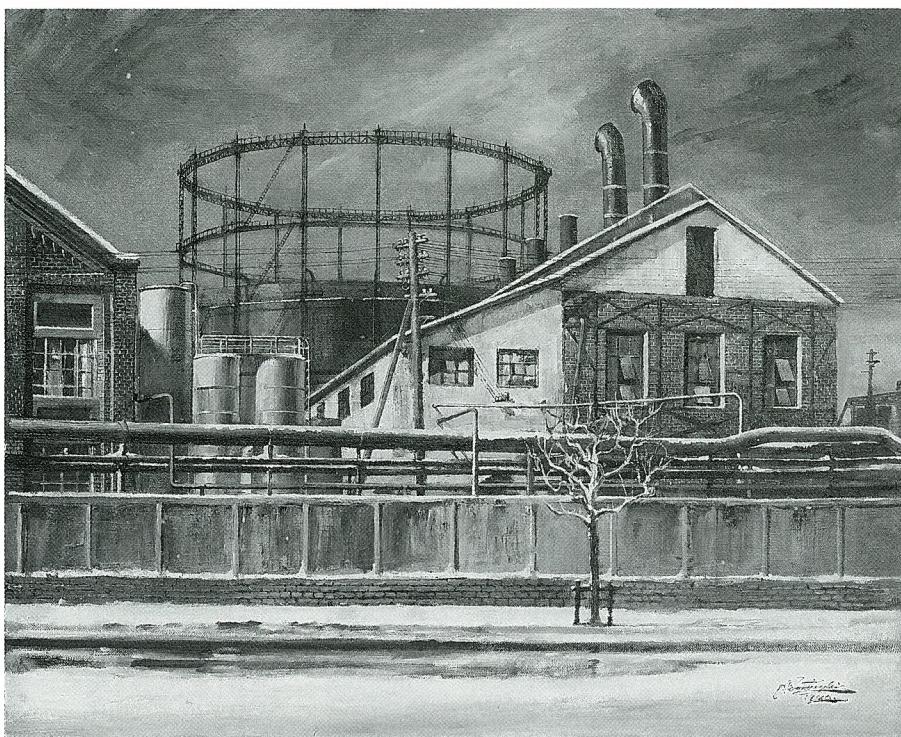


写真 1 小松崎茂画（東京ガス千住工場のガスタンク）昭和 55 年

丁目にある東京ガス千住工場を描いた、縦五二cm×横六三・五cm の油彩画です（写真 1）。赤レンガの工場の屋根の向こうにガスタンクが描かれています。現在のような球型ではなく、円筒型です。絵をよく見てみると、空は薄暗い灰色の雲に覆われ、手前の街路樹には白い雪が積もっています。どうやら、冬の降雪があつた後を描いているようです。また、絵の下側の道路にある、雪が解けて出来たと思われる水たまりには、反射して映っている風景までも緻密に描き込まれていて、小松崎らしい作品といえます。

### 描かれたふるさと南千住

戦災で実家を失い、南千住を離れた小松崎ですが、生まれ故郷への思いを終生抱き、故郷の風景を晩年まで多く描き続けています。また、自伝的絵物語「旭日は沈まず」や、南千住を舞台にした絵物語「どろ

松崎茂の生誕一〇〇年を祝して、「続・下町の空想画家 小松崎茂展」を開催しました。絵物語を中心に、小松崎の作品と画業を紹介したこの展示は、五〇〇人以上の来館者を記録し、大きな反響を呼びました。小松崎茂展の開催後、小松崎家で、南千住の風景を描いた新たな作品が偶然発見されたことを、弟子の根本圭助氏から教えて頂きました。今回は、小松崎家のご厚意により、その作品を皆さんにご紹介したいと思います。どんなん作品？ 作品は、南千住三

丁目にある東京ガス千住工場を描いた、縦五二cm×横六三・五cm の油彩画です（写真 1）。赤レンガの工場の屋根の向こうにガスタンクが描かれています。現在のような球型ではなく、円筒型です。

絵をよく見てみると、空は薄暗い灰色の雲に覆われ、手前の街路樹には白い雪が積もっています。どうやら、冬の降雪があつた後を描いているようです。また、絵の下側の道路にある、雪が解けて出来たと思われる水たまりには、反射して映っている風景までも緻密に描き込まれていて、小松崎らしい作品といえます。

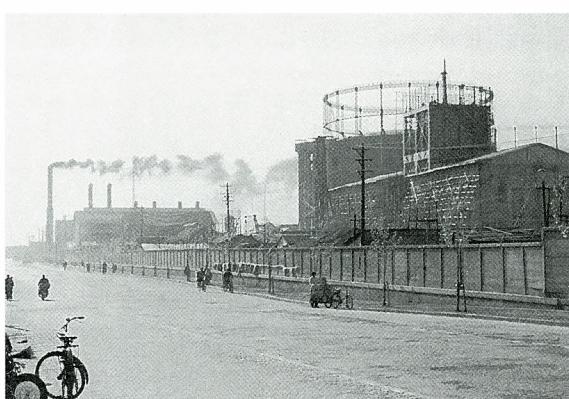


写真 2 「東京ガス千住工場」昭和 30 年頃 当館蔵

写真 2 は、昭和 30 年頃の東京ガス千住工場です。写真 1 と比較してみると、ガスタンクや工場、道路沿いの壁など忠実に描かれていることがわかります。つまり、小松崎が描いた作品は、往時の風景や生活を知るうえで大変貴重な作品ともいえ、今でも私たちに郷土の記憶を伝えてくれています。〈宮部俊周〉

んこ天使」といった作品の世界でも、南千住の風景が登場します。中でも、ガスタンクはその題材の一つとしてよく描かれています。ガスタンクは小松崎にとって、故郷を象徴する風景の一つだったのかもしれません。

な幅の板になります。  
そのように、たんすの部位ごとに準備した  
板に木釘を打ちこんで、外枠部や引出しを組  
み立てていきます。以上、白木のたんすに組  
み上げるまでが作業の区切りとなります。  
**仕上げの技** 続いて、仕上げでは、色付けや  
金具の取り付けなどを行います。  
色付けには、黄色と白色の砥こすりの粉を調合し

作は、木地職人と仕上げ職人との分業で、仕事をしていますが、川俣さんはその両工程を一貫して、一人で手掛ける技術をもっています。

**木地作りの技** 木地作りでは、板の選定から始め、たんすを組み上げるまでを行います。通常、桐たんすに使われる桐材は元々は幅が広い一枚板ではなく細長い板。あらかじめ板のどの木目の部分を、たんすのどの部位に使うかを見定めた上で、桐材を裁断し、使う部位ごとにうまく木目が揃うようにハタガネ

The image shows the front cover of a book titled 'こぼれ話' (Koboreki) by '桐たんす' (Tachitansu). The title is at the top, with '(13)' below it. The author's name is at the bottom. The background is white with green decorative borders on the left and right sides.

桐たんすは、着物を収納しておくのに欠かせない家具です。川俣頼二さんは先代の父・善七氏（故人、元区指定無形文化財保持者）に師事して技術を受け継ぎ、東日暮里の工房で桐たんすを製作しています。



### 写真1 板はぎ作業をする川俣さん



写真2 川俣さんの作例 桐たんす（時代仕上げ）

者もいた方が、外注するよりも仕事の効率もよいことから、技術を修得したそうです。桐たんすを蘇らせる技 桐たんすは、昭和60年（一九八五）代までは、まだ一般家庭で多く使われ、嫁入り道具の定番として、最盛期には月に一〇〇棹もの注文がありました。昔敷きの和室から、クローゼットのある洋室を中心へと生活様式が変化したことに伴い、平成に入る頃から、桐たんすの需要は低下しはじめ、新規の注文も減つていつたそうです。

一方で、昔から修理の依頼は隨時来ているそうです。桐たんすは表面を削り直すことで

て色合いを調節する砥の粉仕上げと、バーナーで表面を焼いて白色の砥の粉を塗ることで灰色に木目を浮立たせる時代仕上げがあります（写真2）。

ここまで来ると最終段階。ちょうづかい蝶番や引手など  
の金具を取り付けて、引出しの固さを調整するなど、最後の微調整を経て完成となります。ところで、川俣さんは、仕上げの技術を親戚の仕上げ職人の小沼氏おぬましから習いました。木地作りだけでなく、仕上げまで一人でこなす職人は稀でしたが、工房内で仕上げもできる

川俣さんの桐たんすの技術は、平成26年度に荒川区指定無形文化財となりました。それに伴い、この度、伝統工芸技術の記録映像「伝統に生きる」では、川俣さんの修業時代の思い出や、桐たんす製作に懸ける思いなどを収録しました。なお、先代の善七さんの仕事ぶりも平成元年度に制作された映像に記録されています。いずれも、区内図書館で貸出しているほか、当館一階の郷土学習室でもご覧頂けます。親子二代の職人技を是非ともご鑑賞ください。

見事に再生できるのが特徴です。購入以来、愛着をもつて長年使い続ける人が多いのです。川俣さんは、「桐たんすは季節や場所の湿度環境で引出しの固さが変わるので、配達して実際に使う部屋に据えつけてみて、引出しが問題なく使えるか確かめる。その後も、引出しの調子がよくなないと連絡をもらえば、駆けつけて鉗掛けして調整する」と言います。販売後も続く、このきめ細やかな心遣いが、使う人と職人の末長いつながりを支えているのです。

## あらかわモノ知りシリーズ

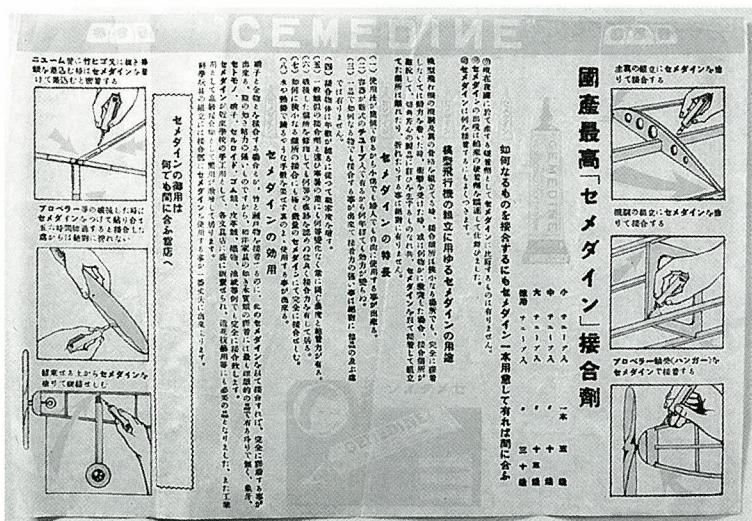
第一回

### セメダインの誕生と模型ブーム

模型作りにはセメダイン 黄色いチューブの接着剤「セメダインC」。学校の工作や模型作りなどで一度は使ったことがあるだろう。そのセメダインを製造していた工場と会社が、かつて荒川区内にあった。

今から約70年前の昭和13年（一九三八）、セメダインCが爆発的に売れた背景には、当時の模型飛行機ブームがあった。セメダインCは、これまでの接着剤と違つて耐水性と耐熱性に優れ、模型飛行機や艦船などの模型を作るときに欠かせないアイテムだった。セメダイン写真の広告は戦前のもので、用途の第一に「如何なるものを接合するにもセメダイン」とあげ、第二に、「模型飛行機の組立に使用に用ゆる」とあげられ、広告の両脇にはその使用例がイラスト付きで載っている。当時の模型飛行機は、木製ソリッドモデル（実物縮尺模型）といわれるもので、実際に動かし、飛ばすことが前提だった。そのため、いがなるところにも使え、衝撃でぶつかっても壊れないとうたわれている。

セメダインはあらかわで セメダインは、今村化学研究所（後にセメダイン株式会社となる）という会社で開発された。創業者の今村善次郎は国産の接着剤作りに強い意欲を持ち、大正12年（一九二三）に台東区初音町で接着剤類の製造販売を始めた。昭和13年には、尾久町一〇一一七六〇番地（町屋三丁目）に工場を



戦前のセメダインの広告（当館蔵）

建設。そして昭和16年には、尾久の工場と同じ敷地内に、有限会社今村化学研究所（本社）が設立された（『セメダイン五十年史』）。

工場設置当時、この辺りは、一面にヨシが生え、人家もないところだったそうだ。生産量の増大につれ、尾久の工場では区内で女子従業員を募集するも、応募がなく、再度区外にも募集をかけてやつと三人雇うことができたというエピソードが残っている。その頃区内には増島製針（大正13年、南千住にて創業。蓄音機の針の製造）、旭電化など多くの工場が建ち並び、どこもかしこも働き手が必要だったのだ。その後、昭和49年に尾久の工場は閉鎖し、機能は茨城工場（古河市）に移管

された。

「攻めだせセメダイン」 ところで、セメダインという名前にはどういった意味があるのだろう。会社のHPによると、「セメダイン」とは、「強い接合・接着」という意味が込められた造成語であるが、その裏にはもう一つ意味が隠されているという。大正時代、接着剤はイギリス製の「メンダイン」と呼ばれる製品が市場の主流を占めていた。創業者である今村は、「メンダイン」を市場から「攻め」出す」という闘志を込めて、「攻め出せ、メンダイン」→「セメダイン」という名前にしたという。実業家にとって大事な「攻め」の姿勢が一世相にも影響されていようが、商品名（会社名）になつていただった。

**戦中戦後のセメダイン** 昭和16年、小学校は国民学校に変わり、国策として模型飛行機の製作が学校の授業に組み込まれるようになった。また、戦意昂揚のための模型飛行機競技会が開かれ、セメダインCの売り上げは伸びていた。しかしながら、昭和18年、原材料不足のために、製造中止に追い込まれた。さらに終戦後、GHQにより飛行機の生産が禁止、模型飛行機の生産も禁止されるが、その後、タミヤ、イマイ、そして、昭和26年には童友社（荒川四丁目）等、模型メーカーが続々と創業した。再び各地で模型飛行機大会が開催され、模型飛行機の人気が再燃した。

昭和31年、東京の模型卸売業者、キットメーカー、部品メーカーによる東京都科学模型教材協同組合が設立された。この中に今村化学研究所が加わっていたことは、いかにセメダインが模型に欠かせないモノとして認められてきたかがわかるだろう。（八代和香子）



「蒙御覽豊年子供角力」(当館蔵)

## 収蔵庫のイタピシー！

浮世繪  
ざらんこうむるほうねんことどもすもう  
「蒙御覽豊年子供角力」

四品目

子ども相撲の浮世絵 今回の一枚は、「蒙  
御覧豊年子供角力」という浮世絵。文久3  
年（一八六三）6月の紋印、歌川国芳（永島  
よしとら）

御覧豊年子供角力」という浮世絵。文久3年（一八六三）6月の改印、歌川芳虎（永島孟斎）が描き、地本絵草紙問屋の加藤（屋）清兵衛から出版されています。

題名通り、この浮世絵の中では、相撲を取っているのは子ども、行司や呼び出しも子どもです。土俵の周りにも、子ども力士たちがずつと並んでいます。

シを食べている子もいます。彼らの視線は土俵の鬼若と荒熊に注がれていますが、上部の番付を確認すると両者とも小結で、足柄の荒熊金太郎、比叡山の鬼若鯉之助だとわかります。この四股名は、後の坂田金時と弁慶ですが、他の四股名も、江戸の金王志武弥（渋谷の金王八幡宮の渋谷金王丸）など、当時の人びとことつておなじみの、地名と結びつかない

歴史上の人物、英雄などをもじった四股名になっています。ただ、東西の最高位、大関の龍王・虎王は、享和2年（一八〇二）、浅草寺で行われた将軍世嗣徳川家慶の子ども相撲上覧の際に大関だつた者の四股名であり（竹内誠「浅草寺における子供相撲上覧」『大江戸を歩く』）、江戸の子ども相撲では伝統的な四股名だつたのかもしれません。

日暮里が発端の子ども相撲流行  
みると、この浮世絵が何を伝えているのか今  
一つ判然としないけれど、この浮世絵が出た  
前の月（文久3年5月）、江戸で流行した子  
ども相撲を描いたものです。

神田雑子町の町名主の斎藤月岑けいとうげきしんは、5月15日の日記に、この頃、日暮里の本行寺で子ども相撲が始まり、人びとが押し寄せたと書いています。さらに、23日の日記には、このご

といえるかもしません。  
ところで、浮世絵に戻ると、大人は後ろの方に描かれています。力士が口に含むはずの力水を、左の人物がほほを赤らめて飲んでいます。麦湯の屋台も出ていて、縁台には、顔の赤い人物が。もしかすると、どちらもお洒落だったのかもしれません。これらは群集を当て込んだ商売でしょうが、飲食をしながらの相撲観戦は、子ども相撲も一緒だったようです。

なお、月岑が、錢を取らなかつたとわざわざ書いていること、さらに、「興行」というお金を取りることを前提とした言葉を用いていふところからすると、實際は内々にお金を取つていたのかもしれません。というのも、安永元年（一七七二）の触以来、相撲年寄以下の相撲渡世集団による勧進相撲以外の素人相撲の興行は、禁止されていたからです。

**江戸の相撲観戦** その勧進相撲が江戸で開催されるのは、春（三月）と冬（十一月）の一回。文久3年の子ども相撲の流行は、相撲を求めの人びとの熱いまなざしが生んだ現象だった

ろ子がんばども相撲が流行つて、下谷数寄屋町の雁鍋の裏の空き地や寺院などで日々夕八ツ時から七ツ時過ぎまで興行が行われ、人びとが群集したけれど、錢は取らなかつた、と記しています。下谷の常在寺、本郷の真光寺も会場だつたらしく、父母が競つて立派なまわし

付記

文献・史料について、相撲博物館の土屋喜敬氏にご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

ところで、浮世絵に戻ると、大人は後ろの方に描かれています。力士が口に含むはずの力水を、左の人物がほほを赤らめて飲んでいます。麦湯の屋台も出ていて、縁台には、顔の赤い人物が。もしかすると、どちらもお酒だったのかもしれません。これらは群集を当て込んだ商売でしょうが、飲食をしながらの相撲観戦は、子ども相撲も一緒だったようです。

## 平成 27 年度の文化館・文化財の動向

- 4月1日 平成 26 年度の区登録・指定文化財を区報で紹介。
- 4月25日～6月7日 「速報！あらかわの文化財展」開催。平成 26 年度の区登録・指定文化財や新たに収集した資料等を紹介。「技をみがけ！若手職人たち展」を同時開催。荒川の匠育成事業の修了者及び研修中の若手職人を紹介。
- 5月14・28日・6月4日 「古文書に親しむ」初級編」を実施。
- 5月22日 第1回文化財保護審議会開催。平成 27 年度区登録・指定文化財諮問。文化財保護審議会委員7名委嘱（再任）。
- 5月23日 伝統工芸技術記録映像「伝統に生きる（あらかわの工芸技術）」（区指定無形文化財保持者・指物 井上喜夫氏）上映会を開催。若手職人による展示解説。
- 6月25日～9月3日 博物館実習受け入れ（2名）。
- 6月26日～7月10日 七夕エントランス展を実施。
- 7月1日 「七夕まつり」を開催。
- 7月3～5日 第36回「あらかわの伝統技術展」開催。伝統工芸の職人さん等72人出演。
- 7月10日～8月7日 特別区自治情報・交流センター（飯田橋）で荒川区の伝統工芸技術と高岡市との交流を紹介する「北陸新幹線がやつてきた 都市交流事業紹介展」開催。
- 7月18日～8月30日 「夏休み子ども博物館」（親子で楽しむ展示解説）、「あらかわ職人道場」、「勾玉作りにチャレンジ！」、「俳句を作ろう！」、「リトル学芸員」昔の道具を調べよう！、「あらかわ調べもの相談室」を開催。
- 8月1日～9月13日 館蔵展「あらかわのたから

- 9月11日 文化財保護審議会合同部会調査実施。
- 9月18日～10月9日 「俳句を作ろう！」エントラーンス展を開催。
- 9月29日～10月27日・11月17日～12月15日 「古文書に親しむ」中級編」を実施。
- 9月30日 「荒川ふるさと文化館だより」34号刊行。
- 10月1日 中根喜三郎氏（区指定無形文化財保持者・和竿）が、東京都名譽都民として顕彰。川俣頼三氏（区指定無形文化財保持者・桐たんす）が、東京都功労者として表彰。
- 10月6日～11月24日 学校職人教室実施。伝統工芸の職人さん、区内24の小学校で実施。
- 10月17日～12月6日 企画展「続・下町の空想画家 小松崎茂展」開催。関連イベント、記念講演会（11月7日 講師姜竣氏、コメンテーター・土居浩氏）、展示解説（10月31日・11月28日 学芸員、11月7日 根本圭助氏）実施。
- 2月12日 平成 27 年度区登録・指定文化財告示（《指定》有形文化財（歴史資料）題目塔（元禄十一年二月中浣五日銘）〈延命寺所蔵〉、無形文化財（工芸技術）つまみかんざし 戸村絹代氏、《登録》有形文化財（典籍）大般若經（大林院所蔵）、無形文化財（工芸技術）手描友禪 笠原以津子氏）。
- 2月21日 「第12回東西俳句相撲大会」（岐阜県大垣市）に区内中小学生を派遣。
- 2月24～26日 民俗芸能等記録ビデオ（国重要无形文化財松本社中）撮影。
- 3月20日 あらかわの文化財講座「あらかわ遊園周辺の今昔（煉瓦堀のある風景）」（講師・伊藤裕久氏、八木橋伸浩氏、齊藤照徳氏）実施。
- 3月31日 伝統工芸技術記録映像「伝統に生きる（あらかわの工芸技術）」（区指定無形文化財保持者・桐たんす 川俣頼三氏）完成。同氏の作品を購入。
- 4月1日～4月17日 平成 24 年度より修復事業を行っていた養福寺（西日暮里三丁目）の「木造二天王立像（伝持国天・伝毘沙門天）」（区指定有形文化財）の木造毘沙門天像が寄託中の東京国立博物館で展示公開。

- 1月22日 第3回文化財保護審議会開催（答申）。  
1月30日、2月13・20・27日 「地域史講座」（地図編）実施。
- 2月6日～3月13日 パネル展「千住大橋のむかし～木橋時代～」開催。「長寿命橋梁（千住大橋）架橋88周年記念パネル展」（国土交通省主催）同時開催。
- 3月20日～3月31日 パネル展「千住大橋のむかし～木橋時代～」開催。「長寿命橋梁（千住大橋）架橋88周年記念パネル展」（国土交通省主催）同時開催。
- 3月31日 渡辺光氏（区登録無形文化財保持者・指物）の「櫻玉空八角印籠作り茶櫃」が、第18回日本伝統工芸士会作品展で経済産業省大臣賞を受賞。
- 4月1日～4月17日 平成 24 年度より修復事業を行っていた養福寺（西日暮里三丁目）の「木造二天王立像（伝持国天・伝毘沙門天）」（区指定有形文化財）の木造毘沙門天像が寄託中の東京国立博物館で展示公開。
- 4月1日～4月17日 平成 24 年度より修復事業を行っていた養福寺（西日暮里三丁目）の「木造二天王立像（伝持国天・伝毘沙門天）」（区指定有形文化財）の木造毘沙門天像が寄託中の東京国立博物館で展示公開。
- 5月1日～5月31日 「荒川ふるさと文化館だより」35号刊行。